

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：11201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23653120

研究課題名（和文） 地域資源としての伝統的地域劇場：東北地方の事例から

研究課題名（英文） Research on local theater "SHIBAIGOYA" as the region resources : the case of the Tohoku district, Japan

研究代表者

小野澤 章子 (ONOZAWA AKIKO)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：30291850

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治初頭から昭和初期に日本各地に設置されその当初の目的が芝居（演劇）上演のための劇場を「芝居小屋」と定義し、特に社会的な視点から考察した。日本各地に 20 館ほど現存する芝居小屋には、地域資源としてその価値が再評価される動きなども高まっている。一方、娯楽嗜好の変化などによって閉館した芝居小屋であっても、それらが長い間地域資源として利用され重要な文化的体験の場となっていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The local theaters of "Shibaigoya" were built for the kabuki, and established in many Japanese communities in the early stages of the Showa Period from the Meiji Period. This is an analysis from the social point of view about these theaters. About 20 Shibaigoya's are in Japan at present. And, the movement to reevaluate those theaters as the region resources rises. On the other hand, many Shibaigoya's were closed by the Showa middle for the reason such as a change in the amusement taste. But, Shibaigoya's have been used as the region resources for a long time, and they are the places of the important cultural experience according to this research.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：芝居小屋、劇場、地域社会、地域資源

1. 研究開始当初の背景

(1) 伝統的地域劇場とは

本研究で対象とするのは、一般に「芝居小屋」と呼ばれ、明治から昭和初期にかけて日本各地に建てられた劇場で、香川県琴平町の金丸座、福岡県飯塚市の嘉徳劇場などが有名である。これらの多くは、建物のデザイン、構造等が当時の建築として貴重な特徴を示し、文化財的価値を有している。また、現代

的な文化ホールで催されるイベントとは異なる、例えば地域住民が自ら出演する演劇や、大衆演劇など、劇場の利用内容に特色がある（このような点から、現代的な劇場と区別するため「伝統的地域劇場」と表す）。最盛期にはこのような劇場は日本中に存在していたと言われている。

(2) 社会的アプローチの必要性

これまでの研究では、以上のような特徴をもつ伝統的地域劇場を、文化財として、あるいは建築物として、また諸芸能の舞台として対象化してきた。

しかし、現在に至る過程で多くの「芝居小屋」は姿を消し、現在では 20 館ほどが利用されているに過ぎないといわれている。現存する劇場では、様々な課題に取り組みながら地域のなかで現代的な意味を持ち続けているところも少なくない。

このような背景を踏まえ、本研究では特に伝統的地域劇場のもつ、地域社会内での役割に着目し、それらがこれからの地域にとって有用な資源となる可能性について検討する。

2. 研究の目的

以上のような背景をふまえ、本研究は、現代的な劇場・ホールとは異なる特徴をもつ、日本各地に現存する「芝居小屋」を伝統的地域劇場と位置づけ、その価値を特に社会的な視点から考察するものである。特に劇場がある地域の産業的特徴を踏まえ、それが地域社会にとってどのような価値を有するのかを明らかにしていく。また、東北地方の事例を中心に検討し、地域的特性を検討する。このような分析から、伝統的地域劇場がもつ地域資源としての役割を考察する。

3. 研究の方法

(1) 各種文献、資料の収集分析
特に以下の課題を明らかにする。

- ① 「芝居小屋」の概念整理
- ② 基礎的情報の収集

これらについては、主として文化社会学、文化学、文化政策学、地域史等の文献を用いて収集に努めた。

(2) 事例の検討

資料分析、現地調査により、特に以下の課題を明らかにする。

- ① 当該劇場の設立の経緯
- ② 所在する地域社会の特徴
- ③ 現在の状況

これらについては、主に秋田県小坂町の「康楽館」、岩手県盛岡市の「盛岡劇場」等を中心に資料の収集分析に努めた。

4. 研究成果

(1) 芝居小屋の概要

① 芝居小屋とはなにか

明治初頭から昭和初期に日本各地に設置され、その当初の目的が芝居（演劇）上演のための劇場を「芝居小屋」と定義することができる。日本各地に 20 館ほど現存すると考

えられ、やや西日本に多いが東北地方から九州まで広く日本各地にあることがわかる（図 1）。



図 1 全国に残る主な芝居小屋
(出典 『康楽館公式ガイドブック』(2010))

このような芝居小屋は最盛期（明治後半から大正期といわれる）には全国に数千あったとも指摘されている。当時中央（東京）で出版されていた代表的な歌舞伎雑誌『歌舞伎』（第 152 号）に掲載された記事「各地の春芝居」によると、大正 2 年正月に公演があった北海道から九州まで（中国大陸含む）の 40 都市 82 カ所の劇場（芝居小屋）名が一覧され、当時全国で多様な演目が上演され多くの人々が、歌舞伎や新派劇、浪花節などを楽しんでいたことがわかる。これらの芝居小屋のほとんどがその後数十年の間に、社会の変化、人々の変化のなかで消えていったことになる。

② 近代日本の劇場の類型

近代以降の劇場を類型化した徳永によると、1) 江戸時代の大劇場の系譜を引き継いだ明治時代の劇場、2) 農村舞台が地域の劇場に転換したケース、3) 商業資本による劇場、4) 本来歌舞音曲を目的にしない公の集会施設、5) 地域の住民が自ら構想し出資し経営した芝居小屋、の 5 つに大別されるが、本研究は 5) の特徴をもつ劇場を取り上げることになり、さまざまな経緯で作られる劇場のうちもっとも地域とのつながりが強いことがわかる。

③ 芝居小屋衰退の背景

消えていった多くの芝居小屋の衰退の背景としては、当初の主要なコンテンツであった歌舞伎の衰退、西洋式劇場・西洋芸術（写実的演劇など）の浸透、第二次世界大戦の影響、戦後の娯楽嗜好の変化（テレビの普及）

などが指摘できる。

④芝居小屋の現状

現存する芝居小屋には、国の重要文化財の5館も含まれ（康楽館、旧広瀬座、呉服座、八千代座、金丸座）（表1）、また全国の芝居小屋が連携しその資源としての価値を再評価する動きなども高まっている。

表1 国重要文化財指定の芝居小屋

| | 康楽館 | (旧)広瀬座 | (旧)呉服座 | 旧金毘羅大芝居(金丸座) | 八千代座 |
|---------|-------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------|----------------------------------|
| 所在地 | 秋田県小坂町 | 福島県梁川町 現在は福島市民家園(福島市)に移築 | 大阪府池田市 現在は明治村(愛知県犬山市)に移築 | 香川県琴平町 | 熊本県山鹿市 |
| 設立年 | 1910(明治43)年 | 1887(明治20)年(推定) | 1892(明治25)年(明治初年に設立した成座を移築) | 1835(天保6)年 | 1910(明治43)年 |
| 設立主体 | 合名会社藤田組 | 町の有志による | 近隣商家の旦那衆による | 金刀比羅宮別当金光院 | 劇場組合 |
| 建物の特徴 | 和洋折衷 | 外観内装とも和風 | 江戸以来の芝居小屋の伝統を残す | 外観内装とも和風 | 外観内装とも和風 |
| 改築等 | 1985年修復復活 | 1994年移築復原 | 1971年移築復原 | 1976年移転復原 | 1980年代後半改修 1989年復活公演 約700人 |
| 現在の定員 | 607人 | | 200人(1階) | 800人 | |
| 現在の使用状況 | 演劇、その他 | 見学中心 | 見学 | 歌舞伎(年1回)以外は見学のみ | 演劇、その他 |
| 現在の所有団体 | 小坂町 | 福島市 | 財団法人明治村 | 琴平町 | 山鹿市 |
| 国重文指定 | 2002年 | 1998年 | 1984年 | 1970年 | 1988年 |

(2) 現存する芝居小屋

本研究では、東北地方で唯一劇場として利用されつづけている芝居小屋を検討した。

鉾山の厚生施設として設置された秋田県小坂町の康楽館（明治43年落成）は、概観は洋風（アメリカンゴシック様式）だが、内部には枱席（棧敷席）、花道や廻り舞台など典型的な歌舞伎上演のための機構をもつ芝居小屋である。鉾山の衰退とともに廃れ、一時期はほとんど使用されない状況であったものの、住民の保存運動によって修復オープンした昭和61年以降は、常設公演などを積極的にを行い、重要な観光資源として利用されている（表2、図2）。

表2 康楽館のあゆみ

| 西暦(元号) | 康楽館の出来事 |
|------------|--|
| 1910(明治43) | 小坂鉾山の厚生施設として開場 外観洋風、内部は棧敷の和洋折衷 電気照明 こけら落としは大坂歌舞伎の一座 芝居、音楽会等盛んに利用 |
| 1945(昭和20) | 戦争中は利用減少 強制連行された中国人労働者の宿舎に |
| 1947(昭和22) | 劇場として再開 歌舞伎、演劇、映画、音楽会、寄席など |
| | 鉾山景気の減衰とともに劇場は廃れる |
| 1970(昭和45) | 老朽化・機能低下により一般興行中止 |
| 1985(昭和60) | 同和鉾業から小坂町へ寄付 修復保存運動始まる |
| 1986(昭和61) | 修復オープン 常設公演始まる |
| 2002(平成14) | 国の重要文化財に指定 |



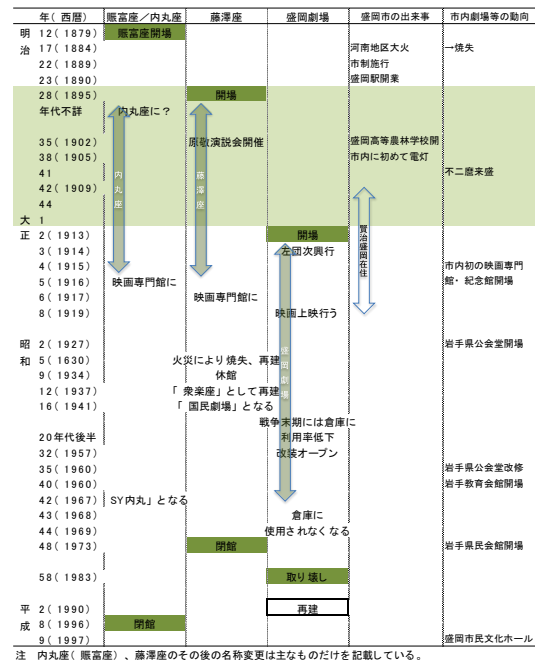
図2 康楽館（2012年10月撮影）

(3) 閉館になった芝居小屋

明治初頭にはすでに芝居小屋があったことが記録に残る岩手県盛岡市においても、大正初期には3つの芝居小屋（内丸座、藤澤座、盛岡劇場）が競い合うように存在していたことが資料から判明した。明治30年代は先行する2つの芝居小屋がそれぞれの特徴を生かして多くの客を集めた。さらに、当時最新の機構を揃えた盛岡劇場が大正2年に開場すると、盛岡という都市全体にその影響は広がっていった様子が、地元紙等に記録されている。

先行した2座は映画館に転向後に廃館し、盛岡劇場も15年にわたる廃屋状態の期間を経て取り壊され（現代的な公共文化施設として再建されているものの）、現在の盛岡は芝居小屋が存在しない状況となっている。

表3 盛岡における芝居小屋の盛衰



これらの変遷をたどると、近代以降の地域社会において芝居小屋が多く地域住民と関わりながら発展し、また人々の嗜好の変化、都市の発展や経済状況の変化のなかで衰退していったことが指摘できる。

(4) 地域資源としての芝居小屋

さらに、最盛期（明治後半から大正期）における盛岡の状況について、中央（東京）で発行された演劇雑誌の記事をてがかりに分析すると、芝居小屋が情報の発信源となって新しい観客を引き寄せ重要な文化的体験の場となっていたことが明らかになった。

当時の演劇雑誌『演芸画報』（大正4年2月号）に、東北地方へ巡業した木村錦花（前年11月に盛岡劇場公演を行った二世市川左團次一座の興行主任）のエッセイが掲載されている。

「昔から盛岡は質素の土地で、普通の人の家では婦人子供の外出を禁じ、芝居見物は最も厳重かつた想です。随って此處へは名優が来なかったので、仙臺まで来て後へ引返すか、夫共此處を抜いて、仙臺から直ぐ青森へ行くと言うのが順序でした。何でも掛小屋の時代に尾上多賀之丞が来たのと、先代の寿美蔵さんが見えた位のもので、誰も余り好んで行かなかったのです。此盛岡劇場が出来てから中流以上の人が女子供を見物に寄越す、堅い商家の旦那連も肩を入ると云う騒ぎで、今では東京の俳優が行けば屹度と当たると極まって居升。歌右衛門さんも幸四郎さんも貞奴さんも好結果で有った相で、此方的一座も二日目から満員を掲げると云う景気でした。是からは毎年一回づゝ東京から名優を招ぶのだと、川村君は力味で居られました。」

一部の人の楽しみだった芝居が、劇場の開場によって多くの人の好むものとなり、「騒ぎ」となっている興奮をここから読み取ることができる。



図3 盛岡劇場（大正2年開場）
（出典『図説盛岡四百年 下巻II』（1992））



図4 現在の盛岡劇場（2011年10月撮影）

平成2年に同じ場所に再建された盛岡劇場は盛岡市の市制百周年記念事業のひとつとして再建された。その際には初代の盛岡劇場に関わった多くの人々が再建を支援した。人々の嗜好の変化、都市の発展や経済状況の変化のなかで衰退していった芝居小屋だが、明治から昭和にいたる時期に芝居小屋に集った多くの人々がつくった基盤が、その後の盛岡における文化活動となっていったことが指摘できる。

<引用文献>

- 康楽館（編）（2010）『康楽館 公式ガイドブック』（創建百周年記念誌）秋田文化出版。
徳永高志（1995）「近代的劇場の成立と芝居小屋：西日本を中心に」『松山東雲女子大学人文学部紀要』3：51-64。
徳永高志（2010）『公共文化施設の歴史と展望』晃洋書房。
吉田義昭・及川和哉（編著）（1992）『図説盛岡四百年 下巻II 明治・大正・昭和編』郷土文化研究会。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 小野澤章子、細江達郎、明治末から大正期の演劇雑誌にみる盛岡の芝居小屋、岩手フィールドワークモノグラフ、査読無、15巻、2013、1-13
② 小野澤章子、細江達郎、地方都市における近代芝居小屋の盛衰 盛岡市の検討、岩手フィールドワークモノグラフ、査読無、14巻、2012、1-18
<http://hdl.handle.net/10140/4668>

〔学会発表〕（計 1 件）

①小野澤章子、地域資源としての芝居小屋：
盛岡における成立と衰退のプロセス、現代行
動科学会第 29 回大会、2012. 11. 10、岩手大
学（岩手県）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野澤 章子 (ONOZAWA AKIKO)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：30291850